國學院大學学術情報リポジトリ

The Meaning of Offering Flowers : Murasakinoue and Empress Akikonomu's Exchange of Spring and Autumn Waka in the “Koch ō" Chapter of The Tale of Genji

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kameya, Shoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000674

供花する紫の上
―『源氏物語』「胡蝶」巻の春秋争い―

亀谷粧子

はじめに

『源氏物語』「胡蝶」巻では、六条院における秋好中宮主催[1]の季御読経を舞台として、紫の上と秋好による春秋争いが展開される。これは「少女」巻に展開された春秋争いの後日譚となっている。また、同場面には、前日に春の町で催された異国情緒あふれる舟楽の余韻が感じられ、秋の町の季御読経という仏教的空間に神仙境的なものが併存している。

「胡蝶」巻の春秋争いは、秋好の「心から春まつ苑はわがやどの紅葉を風のつてにだに見よ[2]」（少女㈢―八二頁）への返歌を皮切りに始まる。紫の上は、秋好の、秋という季節を誇る歌に詠み返すことに先立って、秋好が修する季御読経の供養として「供花」したとある。

春の上の御心ざしに、仏に花奉らせたまふ。鳥、蝶にさうぞき分けたる童べ八人、容貌などことにととのへさせたまひて、鳥には、銀の花瓶に桜をさし、蝶は、黄金の瓶に山吹を、同じき花の房いかめしう、世になきにほひを尽くさせたまへり。

（「胡蝶」㈢―一七一～一七二頁）

季御読経は、春秋二季、それぞれ吉日を選び、紫宸殿に百僧を

請じて大般若経を四日間講ずるという宮中行事であるため[3]、紫の上は、季御読経にふさわしい「供花」という行為を口実に、秋好に返歌したとされる[4]。供える花には、迦陵頻（鳥）と胡蝶（蝶）の舞童の衣装に見立てて、春の町に咲き誇る桜と山吹を選び、手紙とあわせて秋好の西南の町に届けさせた。

紫の上　花そののことてふをさへや下草に秋まつむしはうとく見るらむ

宮、かの紅葉の御返りなりけりとほほ笑みて御覧ず。昨日の女房たちも、「げに春の色はえおとさせたまふまじかりけり」と花におれつつ聞こえあへり。

（「胡蝶」㈢―一七二頁）

手紙を受け取った秋好は、紫の上の歌が、秋を誇って詠んだ「春まつ苑は」（「少女」㈢―八二頁）に対するものであることを察して微笑む。秋好は、次のように返歌した。

中宮「昨日は音に泣きぬべくこそは。

こてふにもさそはれなまし心ありて八重山吹をへだてざりせば」

とぞありける。

（「胡蝶」㈢―一七三頁）

秋好は、紫の上側の心隔てを「八重山吹」と指摘しながらも、春の美しさを認める気持を紫の上に返した。紫の上と秋好による歌の贈答に展開された「胡蝶」巻の春秋争いは、春を誇る紫の上が勝ちを得たようにみえる。

しかし、この争いは優劣を定めるものではない。女房たちが「げに春の色はえおとさせたまふまじかりけり」（「胡蝶」㈢―一七二頁）と讃える傍らで、秋好が紫の上の歌に微笑みを浮かべたのは、彼女が自分の負けを認めたからではないだろう。物語は、彼女たちの歌の応酬の顛末を「すぐれたる御労どもに、かやうのことはたへぬにやありけむ、思ふやうにこそ見えぬ御口つきどもなめれ」（「胡蝶」㈢―一七三頁）とし、非常に複雑で白黒つけられない様相を呈している。「胡蝶」巻の春秋争いについて、増田繁夫氏は、「もともとこの春秋の論は勝ち負けを定めようというよりは、春秋それぞれに比較できないよさを認めた上で、さらに争うことで一層のその季節の興趣を添えようというものであった」と述べる[5]。

では、何故、中宮主催の季御読経という厳粛な場において、春秋争いが展開されたのであろうか。それは、六条院春の町と秋の町を象徴する紫の上と秋好の交流に、新たな六条院の世界を表現することにあると仮定される。

本稿では、秋好中宮の季御読経に奉仕するような、紫の上の「供花」という行為を起点として、「供花」という行為を物語

に描く意義、及び、秋好へ返歌をする日として季御読経の催行日を選び取った紫の上の意図を検討することで、紫の上の六条院世界における新たな位置づけを明らかにしたい。

一　秋好中宮主催の季御読経

そもそも秋好が法会を修した目的は何であったのだろうか。何故、中宮である秋好の季御読経が六条院で催行されたのであろうか。紫の上の「供花」という行為を検討する前にまず秋好主催の季御読経について確認する。

古注釈は、『続日本紀』や『本朝月令』、『延喜式』[6]を用いて季御読経を説明する。『河海抄』は、「天平十七年九月平城中宮請僧六百人令読大般若経是濫觴也〔不本歟〕季御読経とは春秋（ニ）内裏にて大般若を講読せらるゝ也引茶とて僧に茶をひかるゝ也中宮東宮これにおなし」[7]とし、光明皇后の季御読経の例を挙げる[8]。また、季御読経は宮中儀式であるため、主催者は天皇、中宮、東宮であったが、摂関期には上皇や有力貴族も修するようになった。季御読経の開催時季は、『江家次第』によると、貞観年間（清和朝）の時代には毎季行われるようになり、陽成朝の頃になると春秋二季の体裁に整えられたとある[9]。

尚、秋好の季御読経については既に、歴史学的観点と作品論の観点より研究されている。甲斐稔氏は、秋好の季御読経は中宮彰子の例に準拠すると指摘したうえで、道長の意向が働いていた彰子の季御読経の催行は、権威の向上を目的としていたことを論じる[10]。湯淺幸代氏は、秋好が季御読経を六条院で修した点に着目し、秋好の六条院における季御読経を華やかに描くことで、光源氏の権威を誇示するのみならず、物語に底流する真実や秋好の抱える不安を覆い隠そうとしていることを指摘する[11]。両論をふまえると、秋好の季御読経には、秋好中宮の権威の確立と光源氏の権勢を示すというような政治的意義がありながら、権威を確保するために冷泉帝との公然たる繋がりを必要とする六条院の実態が垣間見える。

㈠古典文学作品の中の季御読経

『源氏物語』において、季御読経の描写は、秋好の例（「胡蝶」巻）の他に光源氏主催の例がある。

春秋の御読経をばさるものにて、臨時にも、さまざま尊きことどもをせさせたまひなどして、またいたづらに暇ありげなる博士ども召し集めて、文作り韻塞などやうのすさびわざどもをもしなど心をやりて、宮仕をもをさをさした

まはず。

（「賢木」㈡―一三九～一四〇頁）

光源氏が修した季御読経の儀式内容の詳細は描かれていない。けれども、右大臣陣営が政権を掌握する状況下で、光源氏が宮中行事を模した季御読経を自邸の二条院で催行したというその事実は、政権の移行後も光源氏が猶も厳然とした存在であることを保証している。

他の古典文学作品（平安時代までに限る）に、季御読経を描いた場面は六例あり、その中のいくつかを取り上げる。[12]

『うつほ物語』における季御読経は、次の用例のみとなる。主催者は、藤壺腹の第一皇子である春宮であった。

かくて、春宮も、御読経に、「物の初めなり」とて、僧綱たち・名ある智者どもなど召して、論議などさせ給ふ。

（「国譲・下」七九一頁）[13]

春宮は、五歳にして初めて法会を催行した。春宮の季御読経の場面は、彼がやがて帝位に即き、益々の繁栄を藤壺たち左大臣家にもたらす未来を予期させるものでもあり、潜在的な王権を象徴するものともいえよう。藤壺腹の春宮の季御読経を描くことは、結果的に、春宮及び藤壺の王権をより強調することになり、『うつほ物語』を展開していく上で効果的であった。

『今昔物語集』は、中宮遵子の季御読経を取り上げている。[14]

亦此ノ后ハ、毎年ニ二度定マレル事ニテ、季ノ御読経ヲナム行ヒ給ケル。后ノ宮ニハ必ズ不被行ヌ事ナレドモ、此ノ宮ニハ此ク被行ケル也。被行ケル様ハ、四日ガ間僧二十人ヲ請ジテ、御読経ノ間、宮ノ内皆浄マハリテ、魚食ノ気皆断テ、僧房微妙ク□テゾ僧共候ケル。

（巻第一九「本朝」五一七～五一八頁）

右の例はこれまでのものと比較して、季御読経を詳細に描いているものの、「供花」という行為はみられない。中宮遵子が季御読経を毎年二季欠かさず厳格に修していたと、文学作品に描かれたのは、実際に遵子が仏教を篤く信仰していたからであろうし、遵子が政治的問題を抱えていたからであろう。[15]

さて、先に挙げた用例をみる限り、季御読経が古典文学作品において描かれるのは、主催者の権威を高めることや天皇家の血脈を継承していることを証し立てるためといえる。

『源氏物語』は、秋好が季御読経を催行する理由、また、内裏ではなく六条院で催行する理由を明らかにしていないが、他作品用例をふまえれば秋好中宮を権威づけるためであろうし、六条院が、六条御息所の鎮魂する場であることを思えば、[16]娘の秋好が母を追善するために、光源氏の後援を受けて荘厳な法会を修したと解せる。

㈡歴史の中の季御読経

史上の季御読経に関しては、すでに研究成果があるが[17]、本稿でも史料の問い直しをしておきたい。

中宮催行の季御読経の初出は、醍醐天皇中宮穏子の例である。穏子は延喜三年十一月に皇子（保明親王）を出産し、皇子は翌年に立坊したが、病により延長元年四月に薨去した。穏子が季御読経を始修したのが延長二年九月十八日であったことをふまえると、穏子が季御読経を催行する目的は、皇子の供養のためと推察できるが、明記されていない[18]。その後、穏子は、季御読経を三回催行したことが『貞信公記』などに確認できる[19]。

円融天皇中宮遵子の季御読経は、天元五年六月十三日に催行された。遵子の季御読経は、先の『今昔物語集』に確認したが、史料においては『小右記』に記録されている[20]。催行者としての遵子の意図は確認できない。ただ、理由としては、遵子は子を持たなかったために「素腹の后」の異名がついたことや、彼女の立后が女御詮子や兼家（詮子の父）の憂憤を招いたことなどが考えられる[21]。

注目したいのは、秋好の季御読経の準拠として指摘されている、中宮彰子の季御読経である[22]。彰子は、出産などを理由に、季御読経を私邸（上東門院）において催行したこともあった[23]。彰子の場合、回数は多いものの、記録は簡略的で「供花」のような法会の仔細については確認できない[24]。ただ、道長と彰子をはじめ道長の血縁者たちが季御読経をはじめとする仏事を政治的に利用していたことが指摘されている[25]。

以上より、季御読経には、催行者および催行者を援助する者の権威を誇示する一面があることを改めて確認した。また、紫の上が行ったような「供花」は、史料や他作品に確認できず、法会の場に散見する行為ではないと考えてよいだろう。

二　「供花」という行為

「供花」は、仏前に花を供えて供養すること、あるいは、供花会の略語と一般的に理解される。供花会とは、仏に生花を供養する法会のことで、京都の六波羅蜜寺における法華八講を結縁供花会と称したのが始まりとされ[26]、六条殿の持仏堂、長講堂の供花会が有名である。「供花」の辞書的意味を要約すると、「供花」とは、仏前などに花を献じることの総称で仏前などに献じるすべての花供養のことをいい、『釈浄土二蔵義』一五には、「一華供え散じ、一声南無すれば、即ちこれ仏因、即ちこれ仏行」（浄全一二・一七八下）とある[27]。また「供花」は、桜会や四箇法要

における舞楽法要でも、重要な儀礼とされていた。[28]

仏に花を供える「供花」という行為が、公的性格を有する法会のなかで行われるとき、「供花」という行為は、法会の構成するものの一つとなり、特別な意味を持つ。であれば、秋好中宮の季御読経において行われた、紫の上の「供花」という行為は、法会に関与するような公的なものであったのではないだろうか。本節では、「供花」という行為の、物語上の意義を検討していきたい。

(一)古典文学作品の中の季御読経

『源氏物語』は、紫の上の「供花」を「春の上の御心ざしに、仏に花奉らせたまふ」（「胡蝶」㈢―一七一頁）と表現し、[29]秋好の季御読経への供養の志として行われたとある。『一葉抄』は、「春まつそのハとありし御返事をわさとハなくて此御読経のついてにし給也」[30]とし、紫の上の「供花」は、秋好の「春まつ苑は」への返歌のついでとして行った、と積極的な解釈をしている。紫の上の「供花」は、季御読経において行われたが、『江家次第』の季御読経の記録に紫の上が行ったような「供花」はみえず、『北山抄』[31]や『西宮記』[32]など他の有職故実書にも記されていない。

分華僧左右各十人　散華僧在西一　居二南廂一、堂童子著座、用南廂、入自中央行華宮歩復座、衆僧行道畢、唄不起、堂童子昇、納二華筥一退、[33]

右の記録は、『江家次第』にみえる季御読経に関するものである。傍線箇所に、散華という言葉が確認できるが、この散華という行為は、僧侶らが読経しながら花を撒いて仏の供養を行うものである。[34]一口に「供花」といっても様々な種類があり、実際の季御読経において散華は行われても、紫の上が行ったような、供養舞の童たちに花を伝供させる方法での「供花」は類例がなく、本来、法会など特別な場での「供花」は、散華のように僧侶たちが先導して行うものである。

物語の中の行為とはいえ、紫の上の「供花」は、主催する側ではない人物が主催者・秋好とともに法会の催行に携わるかのようであり、実際の「供花」と全く次元の異なるものといえる。であれば、古注釈以来、紫の上が秋好に返歌するための手段として解されている「供花」を、「花そのの」の和歌と同じく、春の優位を主張するような紫の上の主体的な行為として捉えることはできないだろうか。

古典文学作品には仏教的表現をしばしば確認できるが、平安時代までの作品（『源氏物語』を除く）に限れば、法会における「供花」の描写は『今昔物語集』の「於山階寺（興福寺）　行涅槃会語第六」

に一例みえる。[35]

「此ノ国ノ人、世ヲ背テ冥途ニ至ル時、閻魔王冥宮在マシテ、『汝ハ山階寺ノ涅槃会ヲバ礼タリキヤ否ヤ』トゾ問給フナル。此レニ依テ、涅槃会ニ参レル道俗男女、皆此ノ会ノ供花ノ唐花ヲ取テ冥途ノ験ニセム」ト云ヘリ。此ノ事ハ、虚実ヲ不知ズト云ヘドモ、人ノ語リ伝フル所也。

（巻第一二「本朝」一七〇頁）

右には、人々の供えた花が冥界に渡った際に仏教を信仰した証になると記されている。『今昔物語集』の例をふまえると、花は仏教教義そのものといえよう。

『源氏物語』に描かれる、日常の営為としての「供花」についても触れたい。ここで留意したいのは、『源氏物語』は、「供花」を行為者の主体的な意図によるものとして描いていることである。[36]『源氏物語』において、仏に花を供える「供花」の行為者としては、北山の尼君、女三の宮の傍にいる若い尼、宇治八の宮が挙げられ、それぞれ仏道修行に励む人物である。北山の尼君が仏に花を供える姿は、光源氏と惟光が目にした。

ただこの西面にしも、持仏すゑたてまつりて行ふ尼なりけり。簾すこし挙げて、花奉るめり。中の柱に寄りゐて、脇息の上に経を置きて、いとなやましげに読みゐたる尼君、ただ人と見えず。

（「若紫」㈠―二〇五～二〇六頁）

右は、尼君の初登場場面である。尼君の、仏に花を供える行為は声明や座禅、念仏などと同じく日々の修行の一環であり、尼君は西方の極楽浄土を想って西面の部屋で修行に励む。尼君の、仏道を志して持仏に念じる姿や花を供える姿は、品のある女性として印象付けるものである。仏道修行としての「供花」は、女三の宮の出家生活にも描かれ、「十五夜の夕暮に、仏の御前に宮おはして、端近う眺めたまひつつ念誦したまふ。若き尼君たち二三人花奉るとて、鳴らす閼伽坏の音」（「鈴虫」㈣―三八一頁）とある。とりわけ、八の宮の例は、「供花」が如何に重要な行いであったのかを示している。

おはしましし方開けさせたまへれば、塵いたう積もりて、仏のみぞ花の飾り衰へず、行ひたまひけりと見ゆる御床など取りやりてかき払ひたり。

（「椎本」㈤―二一一～二一二頁）

薫が亡き八の宮の修行部屋に入ってみると、部屋には塵がひどく積もり、勤行用の座席なども片付けられていたが、仏前の花の飾りだけは以前と変わらない様子であった。それは、八の宮が在家でありながらも仏道修行に熱心であったことを暗示しており、仏教において「供花」が非常に重要であることを示して

いる。[37] 女三の宮の持仏開眼供養のときにも、「夜の御帳の帷子を四面ながらあげて、背後の方に法華の曼陀羅掛けたてまつりて、銀の花瓶に高くことごとしき花の色をととのへて奉れり」（「鈴虫」㈣―三七三頁）と、花について詳しい描写がある。主催者は女三の宮であったが、持仏開眼供養には朱雀院や光源氏、紫の上も尽力した。「供花」が、誰の指示によるのかは定かでないが、持仏開眼供養を主導した光源氏と考えられる。

ここまで、古典文学作品では、仏に花を供える「供花」という行為をどのように表現しているのかを確認してきた。それより明らかとなったのは、「供花」の行為者のほとんどは、仏道を志す人々であった。また、法会の主催者に奉仕するかのような「供花」は、紫の上の他に確認できない。

㈡歴史の中の季御読経

史料における「供花」の用例は、平安時代までのものに限ると、一四例確認できる。[38]

藤原実資の不動尊像供養、白河上皇の五十賀、白河法皇の尊勝寺供養、公家の尊勝寺での一切経供養の四例は、供養舞の童によって花が供されたようである。とりわけ注目したいのが、道長の法華八講に関する記録である。道長は、寛弘元年五月

小右記	① **長保元年八月二十一日条　東三条院の慈徳寺供養** 同剋事始、法會儀式存例、但准御」齋會行之、兼日宣旨下、道師權僧正觀修、咒願權第大僧都明豪、唄少僧都濟信・律師尊叡、散花律師定澄・律師慶円、引頭律師明久・前律師嚴久、僧網乎、引頭可尊有先知之例、供花音樂云々、	二巻、五六頁
	② **寛弘二年六月七日条　藤原実資の不動尊像供養** 其事用真言供養、十第（弟）子有執物、此中有香象、有供花童、供花了鳥舞、有被物、法師執之被之、次講師十第（弟）子僧東方、脱衣被舞童、次胡蝶儛、	二巻、一一九頁
	③ **治安二年十月十三日条　太皇太后（藤原彰子）の仁和寺観音院供養** 折櫃、採之〔彩色カ〕、證誠二人在御堂、供花・轉（傳）供如例、内裏并宮々御諷誦使被物、	六巻、一一三頁
御堂関白記	**寛弘元年五月二十一日条　藤原道長の追善八講** 二舟間、舞臺来入中、此間舞童八人取供華至階下、僧八人受之供佛、此童等退為鳥舞了、	上巻、九〇頁
後二条師通記	**寛治五年十月十六日　藤原師実の千僧読経於延暦寺** 御修法阿闍梨大僧正、半（伴）僧八人歟、御諷誦供花等云々、中央間懸藥師佛像、丈六、端青色、立机一脚、居佛供、	中巻、一七六頁
中右記	① **康和四年四月二十七日条　白河法皇の五十賀於法勝寺** 供花、菩薩六人、蝶舞六人、堂童子六人、蔵人五位□也、進出、行道、法會次第如常、寿命經五十巻・仁王經五十部供養、入夜法會事了、	四巻、一六五頁

②　康和四年七月二十一日条　白河法皇の尊勝寺供養 發樂、十天樂、菩薩・鳥・蝶捧供花二行授僧、楽止、鳥・蝶退着舞臺上草□菩薩舞、次鳥舞、此間蝶分居左右、次蝶舞、了各入樂屋、		四巻、一九八頁
③　長治元年二月二十九日条　公家の一切経供養　於尊勝寺 登高座、次菩薩・蝶供花、各舞了、唄、散花、堂童子入從左右中門着座、〈中略〉分花笥、僧侶下從正面階、經舞臺南階、又下北階相分廻堂一迴、		五巻、一三九頁
④　永久元年十月二十五日条　白河法皇の法勝寺大乗會行幸 次左右菩薩各六人捧供花、至南階［前］授十弟子畢、於前庭舞歸入、次左右舞、万歳［樂］、〈中略〉夕座始、僧侶昇、講・讀師昇、共有樂、散花、廻堂中、	別巻『中右記部類第十八法勝寺大乗會』一四二頁	
殿暦		
①　永久元年十月二十五日条　白河法皇の法勝寺大乗會行幸 次迎衆僧、次迎講讀師、各有樂、次供花、菩薩左右六人也、次舞、左、万歳樂、太平樂、龍王、右、地久、林哥、納蘇利、次堂童子着座、次行道、		四巻、六三頁
②　元永元年閏九月十八日条　藤原忠通の宇治阿弥陀堂供養 仍俄内府及秉燭被渡宇治了、十種供養供花・舞装束・十種物具等從所〻持來、依物忌不見、		五巻、八二頁
③　元永元年閏九月二十二日条　太皇太后（藤原泰子）の十種供養　於宇治阿弥陀堂 万事十種供故殿（藤原師實）公達右大將（藤原家忠）已下・大僧正（覺信）以下充之、供花殿上人・公達部充之、		五巻、八三頁
愚昧記		
①　仁安元年八月十九日条　後白河上皇の法会　於蓮華王院 其後良久上皇渡御〻堂、即被仰可始之由、導師宰相僧都公顯昇礼盤、説法後取布施退出、是供花結願也、秉燭後、着束帯參攝政亭、		一巻、一一二頁
②　治承元年五月十六日条　延暦寺僧綱による供花　於法住寺 山門僧綱爲衆徒使院參事　権中納言語云、昨日參院、是參供花也、法住寺殿也、于時山門僧綱十余人參、上		二巻、二一二五頁

二十一日に、亡き姉、東三条院詮子のために法華八講を修した。「供花」は、道長による追善八講の「五巻日」に確認できる。

二舟間、舞臺来入中、此間舞童八人取供華至階下、僧八人受之供佛、此童等退為鳥舞了、(39)

右には、舞の童八人が「供華」を取って階下に到り、僧八人がこれを受けて仏に供し、童たちは退いて迦陵頻（鳥の舞）を舞った、ということが記されている。ここで、傍線部と紫の上の「供花」の描写を比べてみたい。

鳥、蝶にさうぞき分けたる童べ八人、容貌などことにととのへさせたまひて、鳥には、銀の花瓶に桜をさし、蝶は、黄金の瓶に山吹を、同じき花の房いかめしう、世になきにほひを尽くさせたまへり。〈中略〉童べども御階のもとに寄りて、花ども奉る、行香の人々取りつぎて、閼伽に加へさせたまふ。

（「胡蝶」㈢―一七一～一七二頁）

道長主催の法華八講に確認できる童舞が、迦陵頻と胡蝶の組み合わせかは不明だが、舞の童の人数という点や場面の華やかさという点において、紫の上が舞の童たちを通して行われた「供花」の表現に非常によく似ている。

先学によって、摂関期の貴族たちが、時に、仏事に政治的な価値を見出して修していたことが指摘されていることや[40]、十世紀以降の供養舞としての童舞は、純粋な仏教舞楽というだけではなく、余興的・娯楽的舞でもあったことをふまえると[41]、法会という儀式空間は自身の権力を誇示することに有益であった。法会は社会的評価を得られる好機でもあったことから、紫の上が「供花」という行為で季御読経という規模の大きい法会に携わったとき、その場面には、六条院春の町の主としての紫の上の存在感が放たれていたと考えられよう。六条院における秋好の季御読経を舞台に、紫の上は、中宮に比肩する存在であるかのように振舞い、秋好に壮麗な六条院の春を分与することで、自分自身を誇示していた。紫の上の「供花」という行為は、季御読経の主催者・秋好中宮に奉仕するものでありながら[42]、秋好中宮に比肩する立場として、彼女との交流を図るものでもあった。

三　六条院に咲き誇る桜と山吹

本節では、紫の上が「供花」という行為に用いた花、桜と山吹について再検討したい。紫の上と秋好による春秋争いの場面で、桜と山吹は、どのようなものとして機能しているのであろうか。

すでに論じられているように、『源氏物語』において、桜は紫の上の表象である[43]。「胡蝶」巻の季御読経の場面に描かれた桜と山吹について、植田恭代氏は、「六条院の極楽浄土の象徴性を仏教的な趣向のみで表すのではなく、桜がめだつように迦陵頻を舞うところに特徴がある」と指摘し、桜・鳥（迦陵頻）と山吹・蝶（胡蝶）をさりげなく対比し、春の景物として印象付ける演出は、紫の上を六条院の女主人として最高の地位に押し上げるものであることを論じる[44]。紫の上の「御心ざし」で「供

花」された桜は、やはり紫の上を象徴するものであったといえる。

では、紫の上の表象である桜とともに「供花」された山吹という花には、どのような意味があるのだろうか。

『源氏物語』において山吹は、玉鬘の表象であることが指摘されるが[45]、桜が咲き誇る春の町で催行された舟楽、また、秋の町で催行された季御読経の場面では、秋好やその女房たちは、桜よりもむしろ山吹に注目していた。この秋好たちの態度について、岡部明日香氏は、晩春でありながら花の盛りを保つ不思議な桜をもって漢詩文にみる神仙境を演出する主催者、光源氏と紫の上と、晩春に相応する景物である山吹・藤といったものや現実的な和歌の価値観に基づいて春を称賛する主賓側の中宮、名代である女房の捉え方のずれを描いていることを指摘する[46]。岡部氏によると、山吹は、非現実的な晩春の有り様を誇る紫の上と現実的な晩春の有り様を褒める秋好、両者を対比させるためにあるという。山吹は、たしかに晩春の景物として定着していた。だが、「胡蝶」巻の春秋争いの場面において描かれた山吹は、晩春に似つかわしくない桜の比較対象としてだけ存在するのではないと考える。

ここで、光源氏のまなざしが紫の上を次のように捉えていたことに注目したい。それは紫の上が亡くなった後、「幻」巻で、光源氏が閼伽桶の花を見て紫の上を偲ぶ場面にみえる。

閼伽の花の夕映えしていとおもしろく見ゆれば、源氏「春に心寄せたりし人なくて、花の色もすさまじくのみ見なさるるを、仏の御飾りにてこそ見るべかりけれ」とのたまひて、源氏「対の前の山吹こそなほ世に見えぬ花のさまなれ。房の大きさなどよ。品高くなどはおきてざりける花にやあらん、はなやかににぎははしき方はいとおもしろきものになんありける。植ゑし人なき春とも知らず顔にて常よりもにほひ重ねたるこそあはれにはべれ」とのたまふ。

（「幻」㈣—五三一～五三二頁）

紫の上を喪って憔悴しきってしまった光源氏は、慰めを求めて女三の宮を訪れるが、女三の宮は、光源氏の心に寄り添うことはせず勤行に努める。光源氏は、俗世から離れようとする女三の宮を疎ましく感じつつ、仏前の閼伽桶に浮かべられた花に目を留める。光源氏は、その花の美しさに紫の上と彼女の春を愛する姿を思い起こし、吐露した。そのときに光源氏は、紫の上の居所であった対の庭先に咲く山吹について語った。この場面にも、「胡蝶」巻の、紫の上が「供花」する場面と同様に、山吹の花房の大きさに関する表現がみられる。傍線部には、山吹

が、主の、紫の上がいなくなったことに気付いていないのか、例年よりも立派に花を咲かせていることが記されている。

山吹が玉鬘を表象する花であることに相違ないが、山吹は春の景物であるから、物語は六条院の春、紫の上を讃えるときにも用いている。「幻」巻において、光源氏が山吹を春の象徴として紫の上を思い起こしたことをふまえれば、山吹は、春を愛した紫の上を想起させるものの一つであった。

『源氏物語』は、紫の上を春や桜と幾度も結び付けて描いてきたが、針本正行氏によれば、紫の上が春の女性として自覚をしたのは、「少女」巻の春秋争いで、秋好と歌を詠み合ったときであった。[47] また、「少女」巻の春秋争いについて、「若紫巻以来暗黙の中に了解されていた紫の春としての存在価値が、中宮という公的にも、また光源氏にとっても政治的に重要な女性と対等に、紫が自らの意識下において春を主張することによって顕在化されているのだと考えられる」と述べる。[48]「少女」巻の春秋争いの場面には、たしかに、紫の上が春の町の主として、秋好中宮という絶対的存在が詠んだ歌に異を唱える姿が確認できる。[49]

九月になれば、紅葉むらむら色づきて、宮の御前えもいはずおもしろし。風うち吹きたる夕暮に、御箱の蓋に、いろいろの花紅葉をこきまぜて、こなたに奉らせたまへり。大きやかなる童の、濃き袒、紫苑の織物重ねて、赤朽葉の羅の汗衫、いといたう馴れて、廊、渡殿の反橋を渡りて参る。うるはしき儀式なれど、童のをかしきをなん、え思し棄てざりける。さる所にさぶらひ馴れたれば、もてなしありさま外のには似ず、好ましうをかし。御消息には、

中宮　心から春まつ苑はわがやどの紅葉を風のつてにだに見よ
若き人々、御使もてはやすさまどもをかし。

（「少女」㈢—八一～八二頁）

秋好の「心から春まつ苑は」という歌から、秋好が紫の上を春の女性と認識していたことがわかる。秋の盛りの頃であったため、紫の上は、春の町の五葉松や苔、巌などで箱の蓋を飾り、「風に散る紅葉はかろし春のいろを岩ねの松にかけてこそ見め」（「少女」㈢—八二頁）と秋好に詠み返した。秋好たちはそれを見て、紫の上の趣向の深さに感嘆したが、光源氏が「この紅葉の御消息、いとねたげなめり。春の花盛りに、この御応へは聞こえたまへ」（「少女」㈢—八二頁）と勧めたことによって終止符が打たれなかった。

このように、「少女」巻において、六条院秋の町の主である秋好中宮と春秋争いというかたちで交流したことによって、紫

の上は、春の町の主としての自己を強く意識するようになった。であれば、「胡蝶」巻の春秋争いにおける紫の上の行為には、春の町の主としての彼女の意識が見てとれよう。紫の上が「供花」するために選び取った、晩春の春の町に咲き誇る桜と山吹は、華麗な六条院の春とその町の主、紫の上を象徴するものであった。

四　紫の上に寄与する秋好中宮

最後に、紫の上が秋好へ返歌をする日として季御読経の催行日を選び取った意図、及び、主催者の秋好中宮に対して六条院春の町の主であると主張することに、どのような意味があるのかを考えたい。

秋好との春秋争いは、紫の上に春の町の主であることを意識させ、彼女の主体性を育てるものであることを前節で確かめた。それは、六条院の四町をそれぞれ占める女性たちの交流を促し[50]、結果として、光源氏が想い描く六条院世界、すなわち六条院に住まう女性たちが互いに調和する世界の完成へ貢献した。

全体的にみれば「胡蝶」巻の春秋争いも、光源氏を強く支える、光源氏最愛の紫の上と冷泉帝の中宮である秋好が六条院に強大な権威と調和をもたらすものであった。ただ、秋好の季御読経における紫の上の「御心ざし」による「供花」という、秋の町の法会にそぐわない歌を詠み返したことは、紫の上が六条院のため、光源氏のためにと意図したものであったのだろうか。

秋好という女性は、光源氏が藤壺を喪った後（「薄雲」巻）、光源氏の貴族社会における地位や政治性を保証するようになり、中宮として光源氏の娘である明石の姫君の立后にも貢献する。秋好は、六条院が発展し栄華を極めるために不可欠な存在であった。

「少女」巻で、秋好の歌を契機に春秋争いが展開されたとき、秋好は、六条院秋の町の主の他に、中宮としての絶対的身分を得ていた。対する紫の上は、六条院春の町の主であり、社会的地位という点において、彼女たちの間に圧倒的格差があるのは明らかである。

秋好が六条院において季御読経を催行したとき、冷泉帝中宮としての圧倒的な存在感が放たれていた。それにもかかわらず、紫の上が季御読経の催行日を選び取って、歌を詠み返したのは、中宮主催の季御読経という公的な場がもつ力を理解していたからであろう。

先行研究では、秋好に紫の上の地位を向上させる役割がある

ことが指摘されている。山田利博氏は、「少女」巻の春秋争いが中宮の季御読経という重々しい公的な日に持ち越されたのは、秋好の存在が紫の上の地位向上に寄与する役割があるからで、ここには、「秋好が常に一歩退くことによって紫上を前面に押し出すという六条院の基本的構図」を示されていると論じる[51]。また、岡部明日香氏は、「胡蝶」巻の春秋争いによって六条院が相対化される可能性を説く[52]。両氏の論をふまえると、秋好の季御読経を舞台とした「胡蝶」巻の春秋争いにみえる秋好と紫の上ないし六条院、光源氏を比較するような描写は、それぞれの権威づけに貢献したといえる。

紫の上と秋好による、春秋争いというかたちの交流が、六条院に調和をもたらすものとしてだけあるのならば、秋好主催の季御読経における紫の上の振舞としてふさわしいのは、秋好中宮のために、六条院春の町の主として奉仕するような行為ではないか。

だが、紫の上は、「供花」をしつつ、秋を好む中宮に春を誇る和歌を詠み返した。高木和子氏は、「『源氏物語』においては、儀礼に際して和歌を描く場合には、儀礼そのものを十全に描くために歌を描出するのではなく、その折の人々の私的な感情の機微に焦点を当てる傾向が強い」と述べる[53]。高木氏の論をふまえれば、季御読経という儀礼の場における紫の上と秋好による歌の贈答は、紫の上と秋好中宮による身分の垣根をこえた交流であった。

秋好主催の季御読経の場面に描かれた、紫の上の「供花」と秋好へ歌を詠み返すという行為は、紫の上が六条院春の町の主としての矜恃をもって、圧倒的な地位にある秋好中宮に自分自身の存在意義を表明したものであった。また、絶対的身分にある秋好中宮は、季御読経という社会的な場における紫の上の行為を認めることによって、紫の上の社会的地位を向上させたのである。

おわりに

六条院において催行された秋好中宮の季御読経は、光源氏の協力を得て荘厳な法会となり、「日の御装ひにかへたまふ人々も多かり。障りあるはまかでなどもしたまふ」（「胡蝶」㈢—一七一頁）とあるように貴族社会に強い影響を与え、秋好中宮と光源氏、六条院を権威づけた。その季御読経の催行日を、紫の上は、秋好に返歌する日として選び取り、そこに「胡蝶」巻の春秋争いが展開された。

紫の上が季御読経にて行った「供花」は、主催者の秋好に奉仕するような行為であるが、春の町の桜と山吹が象徴するもの、また、季御読経の場に不相応な、春を誇る歌が詠まれたことについての考察より、秋好中宮の領域に入り込み、春の町の主としての自己を主張するものであったといえる。それらの行為が季御読経という公的な場で、主催者の秋好に認められることは、つまり、春の町の主としての紫の上が中宮という絶対的存在に認められるということであり、紫の上の六条院世界における確固たる地位が証明されたのである。

六条院春の町の主、紫の上と秋の町の主、秋好中宮の交流、及び、春の町の主である紫の上の社会的地位の向上によって、六条院の四町をそれぞれ占める女性たちの交流が促され、六条院世界の女君たちの人間関係を調和のとれたものへと更新させるのであった。

紫の上は、「少女」巻以来、春秋争いを通して秋好との交流する度に自己を据えなおし、六条院の女主人としての位相を獲得していくのである。(54)

注

(1) 原則として秋好中宮は、「秋好」と略して記述する。

(2) 以下、『源氏物語』、『今昔物語集』本文は、新編日本古典文学全集（小学館）に拠り、巻名・巻数・頁数を付す。その他文献については、その都度記した。また、私に傍線等を付した箇所がある。

(3) 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編『角川古語大辞典』（角川書店）、「季御読経」項。

(4) 源氏物語古注集成九『一葉抄』（桜楓社、一九八九年、二二五頁）。

(5) 増田繁夫氏「春秋の争い―玉鬘・初音・胡蝶」（『國文學 解釈と教材の研究』第三二巻 一三号、一九八七年一一月、七八頁（七六～七九頁））。

(6) 『延喜式』（上）「第十三 圖書寮」（神道大系 古典編十一、神道大系編纂会、一九九一年、五五一～五五二頁）。

〈前略〉赤漆鷺足圓机二脚、立二天屯瓶一料、案七脚、一香花、一脱供料、聖僧座一具、禮版座二具、佛布施細屯綿十屯、大蔵省奏、寮官人奏、絲帛、結願日進之、高案、立二佛前一、右二八月擇二吉日一、請二百僧於太極殿一、三箇日修之、其堂内装飾幷官人等潔衣、大體准二御齋會一、臨時御讀經亦同、但於二紫宸殿及御在所一轉讀之時、随二便供奉

(7) 玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』（角川書店、一九六八年、四〇三頁）。『一葉抄』、『孟津抄』、『萬水一露』、『林逸抄』も同じく注釈している。

(8) 『続日本紀』前編 巻一六（新訂増補國史大系、吉川弘文館、一九五六年、一八四頁）。

丁丑。平城ノ中宮ニ請ゾ二僧六百人ヲ一令レ讀マ二大般若經ヲ一。

季御読経は、天平年間に始められたとされる。

(9) 『江家次第』「江家次第巻第五 二月 季御讀經事」（神道大系 朝儀祭祀編四、神道大系編纂会、一九九一年、三〇六頁）。

季御読經、春秋二季、請二百僧於南殿一、讀二大般若經一、其内定二御前僧廿口一、於二御殿一讀二仁王經一、納言・参議各一人著二南殿一、

行事、自餘皆候御殿、貞観御時毎季行之、元慶天皇踐祚後、二季修之、

また、宮中儀式としての季御読経は、倉林正次氏の「季御読経考」（『神道宗教』第一〇〇号、一九八〇年一〇月、二一九～二五〇頁）に詳しい。倉林氏によると、聖武天皇以後の奈良時代、および桓武朝から淳和朝に至る変暗初期に行われた、大般若経読誦行事に季御読経の先行の姿を見出すことができる。

（10）甲斐稔氏「胡蝶巻の季の御読経」（『中古文学』第三八号、一九八六年一一月、四八～五七頁）。

（11）湯浅幸代氏「前坊の娘・秋好中宮の「季御読経」―史上の「中宮季御読経」と国母への期待―」（『源氏物語の史的意識と方法』新典社、二〇一八年、二五七～二七九頁）。湯浅氏は、この場面において、「自身が隠れた帝の父として、いわゆる〈太上天皇〉としての「帝王相」を有している」（二七四頁）光源氏に対して、秋好は違和を感じていると論じる。

（12）他古典文学作品において、季御読経の様子が描写された例（平安時代までに限る）は、『うつほ物語』に一例、『枕草子』に三例、『今昔物語集』に一例（巻第十九、五一六頁）、『大鏡』に一例である（全六例）。また、用例調査には「ジャパンナレッジ」と『日本古典対照分類語彙表』（笠間書院、二〇一四年）を使用した。

『枕草子』（新日本古典文学大系、岩波書店）では、季御読経に関する用例が三例（八〇段、一四九段、二七六段）あり、季御読経の主催者は、中宮定子と考えられる（『権記』長徳元年十月七日条）。二七六段では、季御読経を国家鎮護の経典とされる金光明最勝王経を講ずる法会に並ぶようなものとして数えている。清少納言が定子の季御読経を記したのは、季御読経に関する先学の指摘をふまえると、定子を理想化するためと考えられないだろうか。これについても改めて検討してみたい。

（13）『うつほ物語』の本文は、室城秀之氏編『うつほ物語全 改訂版』（おうふう、二〇〇一年）に拠る。

（14）『大鏡』も『今昔物語集』と同じく遵子主催の季御読経を描く。

いみじき有心者・有職にぞいはれたまひし。功徳も御祈も如法に行はせたまひし。毎年の季御読経なども、つねのこととも思し召したらず、四日がほど、二十人の僧を、房のかざりめでたくて、かしづき据ゑさせたまひ、湯あむし、斎などかぎりなく如法に供養せたまひ、御前よりも、とりわきさるべきものども出ださせたまふ。

（新編日本古典文学全集『大鏡』頼忠伝、一一〇頁）

（15）尚、本稿の「㈢歴史の中の季御読経」で詳述した。

（16）六条院が、六条御息所の鎮魂の場であることは定説といってよいだろう。藤井貞和氏は、六条院世界の本質は六条院の家霊となっている六条御息所を鎮魂するために六条院が完全性の絶えざる更新を強いられる点にあることを論じる（「光源氏物語主題論」『源氏物語の始源と現在』底本　冬樹社、一九八〇年、一五八頁）。

（17）同注（10）甲斐氏論文、（11）湯浅氏論文。

（18）湯浅氏は、注（11）論文において、中宮穏子が季御読経を始める以前に保明親王が盛んに「御読経」を修していたという事実と、穏子による季御読経の記録が、三人目の皇子・成明親王の誕生後みられなくなるという事実から、「穏子の「中宮季御読経」の創始と終焉は、保明親王の死の呪縛とその解放を意味していたことになる」（二六二頁）と述べる。

（19）『貞信公記』（大日本古記録、岩波書店、一九五六年）には、①延長二年九月一八日条「十八日、癸丑、中宮御讀經始、廿僧」（九〇頁）、②延長三年三月一五日条「十五日、參中宮御讀經始、有申文・奏申、而不

召」（九八頁）、③延長四年三月二五日条「廿五日、辛巳、中宮（中宮穏子）・東宮季御讀經始」、④延長五年三月二六日条「廿六日、丁丑、中宮（中宮穏子）御讀經始」とあり、中宮穏子が季御読経を計四回催行したことが記録される。

(20)『小右記 一』（大日本古記録、岩波書店、一九五九年、四一頁）。
巳時（卯刻時）發顔、其儀、於弘徽殿東廂被行也、僧綱三人・凡僧十七人、大夫參入、他公卿稱障（在カ）　不集、藤宰相事了參入、公卿・殿上人座在常寧殿南廂馬道西、大夫不着出、入夜下官退出

(21)『国史大辞典』第一二巻（吉川弘文館、一九九一年、一九七頁）、「藤原遵子」項（執筆者・林幹弥氏）。

(22) 注（10）甲斐氏論文。久保重氏「源氏物語胡蝶の巻　中宮御読経の条私註」（『樟蔭国文学』第七巻、一九七〇年三月、一一～二八頁）。

(23) 彰子は、季御読経を上東門院にて二度催行した。長保三年十月二十一日の季御読経は、東三条院詮子の四十賀の行啓があったということ、寛弘六年十二月二十日の季御読経は、彰子が出産を控えており里下がりしていたから、とそれぞれ然るべき理由がある。

(24) 例えば『御堂関白記』（大日本古記録、岩波書店）には、「廿日、丁卯、宮季御讀經初、廿三日、庚午、宮御讀經結願、家讀初、候（〇）内間有悩氣」（長保二年四月廿日条　上巻、五七頁）のように記されている。

(25) 速水侑氏「摂関体制全盛期の秘密修法」（『平安貴族社会と仏教』吉川弘文館、一九七五年）、上島享氏「藤原道長と院政」（『日本中世社会の形成と王権』名古屋大学出版会、二〇一〇年）など。一方で、道長が仏教を篤く信仰していたことは、晩年の法成寺建立などに明らかである（山中裕氏「藤原道長と摂関政治」『平安時代の古記録と貴族文化』思文閣出版、一九八八年）。大津徹氏は、仏教信仰の中で道長がなしたことは、「「金にまかせて」という面は否定できないが、しかしそれまでの権力者がしなかった独自性があり、またのちの時代のように悪趣味に堕さなかったことは素直に評価すべき」と指摘する（「王朝の文化」講談社学術文庫『道長と宮廷社会』講談社、二〇〇九年、二八一頁）。

(26) 辞書は、『日本国語大辞典』第二版（小学館）と、『角川古語大辞典』（角川書店）、『織田佛教大辞典』（大蔵出版、一九六九年）、『望月仏教大辞典』第一巻、世界聖典刊行協会、一九七四年）を用いた。

(27)『本朝文粋』巻一〇 276に収載される、慶滋保胤の「暮春於二六波羅蜜寺供花会一聽レ講二法華経一同賦二一称二南無仏一」に、「暮春三月、百花争開、別修二四日八講一、号二結縁供花会一。其一日為レ導二一切男子一、二日為レ度二一切女身一、三日為レ済二一切童子一、四日為レ化二一切僧侶一也」（新日本古典文学大系『本朝文粋』岩波書店、一九九二年、二九二頁）、とあり供花会のことを確認できる。

(28)『新纂浄土宗大辞典』WEB版（浄土宗出版、二〇一九年）、「供花」項。桜会とは、奈良時代以後、毎年二月から三月の頃に大寺社で催された法楽で仏神に『法華経』などを供養するもので、四箇法要とは、唄匿・散華・梵音・錫杖の四種の声明曲を中心に構成されている顕教立の仏教法儀のことである。

(29) 紫の上の「供花」について、『河海抄』（『紫明抄・河海抄』角川書店、一九六八年）は、「法会儀蝶鳥供花定事也迦陵頻胡蝶菩薩（或先菩薩）捧供花二行相分経舞台上到壇下信（真本伝）（以下真本ナシ）抒於僧又定者二人取火舎也　金銀事文武天皇御宇自対馬国始献白銀　聖武天皇御宇自陸奥国始進黄金九百両」（四〇三頁）と説明する。

(30) 同注（4）、二二五頁。

(31)『北山抄』「二月 季御讀經」（神道大系 朝儀祭祀編三、神道大系編纂会、一九九一年、五一頁）。
定二僧名 等儀、見二備忘記一。但、東大・興福・延暦等寺、抽請四人、輪轉四人也。其興福寺、去年見學（研）立義者、必在二寺分一。

（32）『西宮記』「恒例第三 九月 季御讀經事」（神道大系 朝儀祭祀編二、神道大系編纂会、一九九三年、二八四～二九二頁）より、花を儀式に用いている箇所を抜粋した。

新楽御寺、延暦寺、延暦寺、左右寺、左右寺、岡請別當寺、興福寺、興福寺、元興寺、大安寺、薬師寺、法隆寺、四大寺、諸衛、左右衛門佐、三人、一諸衛、觸穢例。延喜六年三月。延喜九年。國忌例。天慶四年三月、天暦元年三月

分花僧、左右各十人居二南庇一。下藝堂童子散レ笪。孔子南階、八佾中央、岡北位、自餘各北座。衆僧行道了、堂童子昇取レ笪置。（二八五頁）

（33）同注（9）『江家次第』、三〇八頁。

（34）『望月仏教大辞典』第二巻（世界聖典刊行協会、一九八〇年）、「散華」項。散華を司る僧は散華師と称し、講師、讀師、呪願師、三禮師、唄師、堂達とあわせて七僧と呼ばれた。法会に参列した貴族が散華する例もある。

（35）用例調査には「ジャパンナレッジ」を使用した。平安時代以降では、『とはずがたり』（新編日本古典文学全集、小学館）に「供花」の用例を二例確認できるが、この場合は「供花会」のことを指し、行為としての「供花」ではない。一つは、六条殿において供花会が行われる場面（三〇一頁）に、もう一つは、九月の供花会に、有明の月が参上する場面（三七一頁）にみえる。また『太平記』に、灌仏会の日には「灌仏の水に心をすまし、供花・香に経を翻して、捨悪修善を事とする」と記されている（新編日本古典文学全集、小学館、四一一頁）。

（36）重松信弘氏は、仏に花を供えるということは単純な営みであるが、『源氏物語』においては物語全般の人生に対する思想・情調の進展が象徴されており、瑣細な供花の描写にもことをなおざりにしない作者の配慮と手法とが見られることを論じる（「仏の観念」『源氏物語の仏教思想』平楽寺書店、一九六七年、六九～七〇頁）。

（37）三善為康『拾遺往生傳下巻』「相應和尚」には、「大師謂二和尚一曰。年來見レ汝。毎日供レ花。信心堅固。我欲レ度レ汝云云」（『浄土宗全書』続篇 一七巻、山喜房佛書林、一九七四年、七〇頁）とあり、往生するためには、毎日欠かさず「供花」をすることと説いている。

（38）史上の「供花」の用例調査には、東京大学史料編纂所「古記録フルテキストデータベース」を使用し、「供花」の用例は平安時代までのものに限る。

　また、本稿における『御堂関白記』、『小右記』、『中右記』、『殿暦』、『貞信公記』『愚昧記』の本文は、大日本古記録（岩波書店）に拠る。

（39）『御堂関白記　上』（大日本古記録、岩波書店、一九五二年、九〇頁）。

（40）勝浦令子氏「王朝の仏教と文化」（『摂関政治と王朝文化』吉川弘文館、二〇〇二年）他。笹山晴生氏は、「宗教・文化は王権のカリスマ的権威の源泉として、中世以後にも常に重視されていった」と論じる（「平安時代の王権」『平安初期の王権と文化』吉川弘文館、二〇一六年、一〇六頁）。

（41）服藤早苗氏「舞う童たちの登場―王権と童―」（『平安王朝の子どもたち』吉川弘文館、二〇〇四年、一六五～一九八頁）。また、服藤氏は、九世紀から始まる童舞の空間が王権の場である朝廷から上層貴族邸宅や寺院に拡大し、貴族の邸宅においては貴族の子弟が舞手を担うようになった結果、「童舞」は、王権への服属と奉仕を確認するものから、貴族の子弟が王権に近侍できる身分的特権を得て、父の政治的地位の継承を強めるための手段となったことを指摘する。

（42）袴田光康氏は、秋好がそれぞれの舞手の花に合わせた衣装の禄まで周到に準備できたということは、秋好の季御読経が春の町と秋の町、つまり紫の上と秋好の協力のもとに行われたことを指摘する。（「六条院の春―「胡蝶」巻の蓬莱と浄土―」『国語と国文学』第九一巻、一一号、二〇一四年一一月、六四～七六頁）。

（43）河添房江氏「花の喩の系譜」（『源氏物語表現史 喩と王権の位相』翰林書房、一九九八年）や原岡文子氏「『源氏物語』の「桜」考」（『源氏物語の人物と表現―その両義的展開』翰林書房、二〇〇三年）など

の先行研究がある。

(44) 植田恭代氏「迦陵頻と胡蝶」(『源氏物語の宮廷文化　後宮・雅楽・物語世界』笠間書院、二〇〇八年、二〇三頁)。

(45) 「胡蝶」の春秋争いの場面に玉鬘の〈喩〉である「山吹」が登場したことに関して、上原作和氏は、「山吹」は紫の上と秋好を中心とした「春秋を領導する女たちの物語」の空間から光源氏の色好みの空間へと、「テクストの〈臨界点〉を繋ぐバイアス」として存在していることを論じる(「恍惚の光源氏―「胡蝶の舞」の陶酔と覚醒」『系図をよむ／地図をよむ　物語時空論』勉誠出版、二〇〇一年、一五四～一五五頁)。

(46) 岡部明日香氏「『源氏物語』胡蝶巻冒頭場面の引用表現―漢詩文と和歌的世界の交錯―」(『論叢　源氏物語　3　引用と想像力』新典社、二〇〇一年)。

(47) 針本正行氏「少女巻の春秋論」(『平安女流文学の研究』桜楓社、一九九二年、三三九頁)。

(48) 同注(47)針本氏論文。

(49) 秋好が、「秋を好む」とされるのは、「薄雲」巻光源氏が秋好に春秋の優劣の話題を唐突にもちかけた場面に由来する。藤壺が崩御した年の秋、光源氏が秋好に、春と秋、どちらの季節を好むのかと問いかけたところ、「ましていかが思ひ分きはべらむ。げにいつとなき中に、あやしと聞きし夕こそ、はかなう消えたまひにし露のよすがにも思ひたまへられぬべけれ」(「薄雲」㈢―四六二頁)と、春秋の優劣を定めることは難しいと断ったうえで、母、六条御息所が亡くなった秋の季節に縁がある、と明かしていた。一方、紫の上は「薄雲」巻の春秋争いに直接関与せず、彼女には春の女性としての自覚が芽生えていなかった。

(50) 六条院が落成して人々が移り住む場面には、「この町々の中の隔てには、塀ども廊などを、とかく行き通はして、け近くをかしき間しなしたまへり」(「少女」㈢―八一頁)とあり、光源氏は、六条院に住まう女性たちの交流を円滑にすることを意図して、六条院を造営した。

(51) 山田利博氏「秋好中宮論―その機能的側面についての考察―」(『宮崎大学教育学部紀要　人文科学』第八三号、一九九七年九月、七頁(一～一五頁))。

(52) 同注(46)岡部氏論文、一九〇頁。岡部氏は、「光源氏の願った女君達との理想の生活が、神仙境での常春の風景に表されるとすれば、それを相対化し、現実の四季の営みの春に還元しようとする秋好中宮の視線は、彼女自身が意識しなくとも、光源氏の理想の特異性とそこに潜む矛盾を鋭く突いている」と論じる。

(53) 髙木和子氏「儀礼の歌における私情―朱雀院と秋好中宮の贈答歌」(『源氏物語再考―長編化の方法と物語の深化』岩波書店、二〇一七年、二一七頁)。

(54) 紫の上が、光源氏以外の人間に評価されるということを考えた時、秋好への手紙の遣いとして夕霧が登場したことにも注目したい(「胡蝶」㈢―一七二頁)。この後、夕霧はかの「野分」の日に、紫の上を垣間見て、「春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地」(「野分」㈢―二六五頁)であると評価、認められる。「胡蝶」巻の季御読経の場面において、紫の上が秋好に認められたこと、また、視点人物の夕霧がここに登場したことは、この先、玉鬘や明石の君といった六条院世界の女君たちと比べられ、評価されていく中で、紫の上が自分の存在を確立していくことを予感させるものではないか。

【付記】本稿は、令和二年度國學院大學國文學會一月例会での口頭発表をもとに執筆しました。発表時にご教示戴きました先生方に厚く御礼申し上げます。